

マトリョーシカ

あだち

授業のない平日。今は午後の三時ほどであるが、いや、午後の三時ほどであるので、自室のカーペットに寝転がって、スマホでアニメを観ていた。

昨日寝る前に、スマホのアラームを八時に設定しておいた。だが、今日の朝八時、スマホは私を起こしてはくれなかった。なぜなら、私が設定していたのは朝八時のアラームではなく、夜八時のアラームだったためである（つまり二十時）。たまに寝ぼけてそうになってしまう時がある。

昼過ぎに起きてしまうと、今日はもう何もしなくていいか、という気持ちになる。二十四時に寝るとしても今日という日はまだ十二時間ほどあるので、絶対に生産的な何かを遂行するには十分な時間がある。だが、そういう話ではないのである。つまるところ、やる気の問題。朝八時に起きよう、という昨日の私がした決心を、今日の私は軽々しく粉碎してしまったのである。自分はそんなに目標に向かう意思が薄弱な人間だったのかと思い、ちょっと凹む。そういうやる気のなくし方。

そういうワケで、今日は起きてからずっとダラダラとアニメ。特に気になっているのがあるとかそういうのではなく、twitterで声の大きい、Eがイヤというほど言及

していて、サムネイルに見覚えがあるものを、適当に。

画面の中の女の子が、部屋のソファに寝転がってスマホで動画を観ている。ボケっと観ていたものだから、頭上に掲げていたスマホを顔面に落としてしまい、鼻を赤くして痛がっている。自分も同じ体勢でそれを観ていたの、はっとして横向きに寝転がる。

動画を観ている女の子が映っている画面を私が観ている、という入れ子構造である。私はマトリョーシカを思い浮かべる。

アニメ（映像作品なら別に何でもよいのだが）を観ていて、「キャラクターがその作品の中で何かの映像（劇中劇であるのが望ましい）を観ているシーン」があると、決まってする想像がある。

私が「映像を観ているキャラクター①」を観る

↓キャラクター①が劇中劇内の「映像を観ているキャラクター②」を観る

↓キャラクター②がそのまた劇中劇内の「映像を観ているキャラクター③」を観る……

が無限に続く、という想像である。合わせ鏡に映った物体が鏡のフレームいっぱいまで何重にも広がっていくように、この想像は際限のないところまで広がっていくのである。私は一番大きいマトリョーシカだ。私は無限の

連鎖の出発点に位置しているのである。

こう思うことで、自己肯定感を高めるようにしている。やはりアニメは素晴らしい。

気分が良くなったので、一旦一時停止を押して、起き上がることにした。

そうだ、と思い出す。デイリーミッションとして、花瓶の水を替えなければならないのだった。起き上がった目線の先に置かれているガラスのそれを見て、意識する。所属していた大学の部活動の引退祝いで、後輩たちからもらったものである。大層立派な花束だったので、花瓶に生けることにしたのだ。

花瓶に近づいたところで、微かに音が聞こえてくる事に気が付いた。何だと思つて離れてみると、音は聞こえなくなった。

あやしくなつて、より近づいてみると、音は大きくなつて再び聞こえてきた。大きくなつたことで音の輪郭もはっきりしてきたので分かったが、音の正体は笑い声である。それも、わりも大人数の。

花瓶から、笑い声？

ボタンを押すだけで録音された笑い声（ガヤ）と拍手の音を流すことができる装置が一九五〇年代のアメリカで開発され、それが今でもバラエティ番組においてサウンドエフェクト的に使用されていることは知っている。しかし、私はそういう機能を搭載した花瓶を買った覚え

はないし、そのような花瓶が存在するのも知らないし、多分存在しない。

本当に意味が分からなかったので、気味が悪くなつて花瓶から離れることにした。

そういえば起きてから何も飲んでいないので、喉が渴いた。

冷蔵庫から大きなペットボトルを取り出し、コップに中身を注ぐ。キンキンの水、キンキンの水である。これはとても大事なことで、繰り返し伝える必要があった。結局、冷えた水が一番気持ちいいのである。

それをグイっというこうとして、コップに口をつけた瞬間である。

また、聞こえた。

飲む前のコップをキッチンに置いて、できるだけ遠ざかる。

まただ。笑い声が聞こえてきた。しかし先程とは少しだけ、声の構成が異なっているような気がする。花瓶の時を家族（大人の声と子供の声、両方が聞こえてきたような気がする）と捉えるなら、今のは大人の男女二人の声であつたような感じがする。

未だに何が起こっているのかはよくわからないが、私は花瓶に水をやるうとして、水を飲むうとしていただけである。それだけなのに、はい私今面白いことしちやつてますよ、などとは微塵も意図していないのに、なぜそ

のようなサウンドエフェクトを付けられなければならないのか。私はそれほどまでに滑稽なのか。

段々と腹が立ってきたので、どうにかこうにかして笑い声の正体を突き止めて、もし何か人為的な何かがはたらいっているのであれば（誰かが直接笑っている、ということも十分考えられる）、ガッンと一言言っ

おそらく、疲れているのだ。身体がというよりは、気持ちが疲れている。普通に考えて、私しかない空間から私以外の笑い声が聞こえてくるハズはないのである。

今日はもう一切をやめよう。一日中寝て、明日からまた頑張るのがよいだろう。

そう思い、台所からベッドに向かった道中で、床に落ちていたネクタイを踏んづけて滑ってしまい、ステンと転んでしまった。昨日アルバイトが終わって帰ってきた後に、輪っかを解かずにそのまま床に叩きつけておいたものである。

滑ったネクタイはそのまま空中へ舞い上げられ、輪っかの部分が、輪投げの要領で花瓶にかけられた。

背中とお尻を痛がりながら起き上がり、フオーマルになってしまった花瓶を見る。神がかった角度でゴールしたものである。何だか、前衛的なアートみたいだと思った。そういったモノへの造詣は特にないが。

花も少しは社会に揉まれた方が美しく咲くだろう、な

んてことを思いながら花瓶に近づくと、やはり聞こえてくるのは笑い声。しかし、それとは別に、新たな異変がもう一つ。

私の部屋の花瓶はガラスでできているため、顔を近づけると反射して自分の顔とご対面するようになっている。ハズである。そのハズなのだが、近づけた私の顔は花瓶には映っておらず、代わりに何か、別の映像が映し出されているようだった。

良く見ると、三人家族と思わしき成人男性、成人女性、そのご子息のトリオが、テーブルを囲んで食事をとっている。しかし、何故だか三人とも、視線は私の方を向いているのである。

会話の内容までは聞き取れなかった声も、今度は鮮明に聞こえてきた。

「なあ、なんかずつとこっち見てないか？　今までこんなこと、なかったよな」

「ねえどういう事？　これ。そういう演出かしらね？」

父親と母親らしき奴らが話しているのが聞こえてきた。

おそらく、笑い声の正体もこいつらだろう。しかし、演出？　まるでテレビ番組でも観ているみたいな言い方ではないか。

「誰だ、アンタら。何で俺のこと観てんだよ」

「えっ？　なんか僕たちに向かって喋ってない？　これ」「何これ怖い！　そういう気分じゃないんだけど！」

「ママ、チャンネル変えて！　こわいよお、この番組」
まだ未就学児だろうか、二人の間で子供がぐずっている。母親が机においてあったリモコンのボタンを押すと同時に、ガラスに映っていた風景は見えなくなり、私の顔が映った。花瓶の方からの声も止んだ。

先の家族は明らかに私のことを観ていた。一体、何が起こっているのか。

まだ掴み切れない部分はあるが、とりあえず私の生活風景を家族の団欒のために利用するのはやめてほしかった。

こうなるとちよつとずつ気になってくるもので、キッチンに戻って、先は怖くなって置いてきてしまった水を再び手に取る。

声は先ほどと同様、大人の男女二人のものが聞こえてくる。私の事を観てやいのやいのしているに違いない。腹立たしい。

水も花瓶と同様に、像を反射するものだ。であればさっきのように知らない奴が映っている可能性が高い。

そう思ったが、コップの水面には見飽きた自分の顔が映るばかりであった。

どういうことだ。花瓶にネクタイをかけたなら向こう側の景色が見えたように、何かひと手間加えないといけないのだろうか。

さっきのは完全にアクセシデントだったので、能動的に

何をすればよいのかわからない。わからないので、わからないなりにやってみることにした。

手に持った水入りのコップを、そのまま電子レンジに入れる。とりあえず、ながく十分ほどチンしてみよう。理由は、そのようなことをしたことがないからである。プラスチックのコップをあえてチンしてひしゃげさせる、という想定されていない挙動をすることで、世界が不具合を起こして、さっきと同じ状態に持つていくことができるかもしれない。

あたため時間を十分に設定して、開始のボタンを押す。閉めた扉の窓が、マイクロ波のオレンジの光でいっぱいになる。

あたためを開始する前までは私の顔を映していたそのレンジの窓は、あたためが開始されると同時に、二人の男女を映し出したのであった。

よしきた。さっきの家族に対してはいきなり話しかけてビビらせてしまったので、気づいていないフリをして聞き耳を立ててみよう。

どれどれ……

「へえ、ここでこんなコトすんのか……」

「それってつまり、どういうコト？」

二人掛けのソファに並んで座っている男女が、ポテチをつまみながらそんな会話をしている。理屈がわからないが、やはり、私のことを観ているのだろう。

「というのも、ここでプラスチックのコップをわざわざ電子レンジに入れて十分もあつためるなんて、イミワかんないじゃん。普通に道理が通ってないわけ。何か製作者のメタ的なメッセージが込められているに違いないよ」何を言っとるんだこいつは。

「ふーん。そうなんだ」

「多分なんだけど、これは妊娠中絶のメタファーなんじゃないかな。あつためボタンを押すのが命の始まりとして、レンジの中からこのあとひしゃげたコップが出てくると思うんだけど、それが望まない形で赤ちゃん、まあ赤ちゃんだったものなんだけど、そうだったものと対面してしまうっていう、それを示唆的に表現しているんじゃないかな」

インチキクソ考察も大概にしろ。大体、そんなクソみたいな考察（笑）がやけに流行っていたのは二〇一〇年代前半のボカロ曲シーンくらいではないか。いつの話をしているんだお前は。

「えー、考えすぎじゃない？　いつもそんなこと考えながら観てるのぉ？」

よく言った。どう見ても考えすぎだと私も思う。

「やつぱり何を観るにも、ここ（頭を人差し指でトントン）を使わなきゃね」

もう我慢の限界だったので、残り七分くらいあつたあため時間を、ボタンを押してキャンセルした。会話を

試みてみようとか、そんな気も途中から完全に消失していた。

レンジの発光は消え、暗くなった窓にはいつも通り私の顔と、その向こう側にはひしゃげずに済んだ水入りのコップが映っていた。

私の行動をクソみたいな考察で推し量るのはやめてほしかったし、何よりそれを別の誰かに声高にひけらかすことを真つ先にやめるべきである。

温まった水を飲みながら、そういえば、観ているアニメの一時停止だけを済ませて、スマホをつけっぱなしにしていることを思い出した。

カーペットに置き去りにしていたスマホを拾い上げ、電源を消そうとする。

そこでふと思った。そういえば、私のスマートフォンには背面タップという、誰も使っているのを見たことがない機能が搭載されている。二回タップで画面のスクリーンショット、三回で電源オフを実行できるのだ。別にそれらの操作は他の物理ボタンで実行できてしまうため、わざわざ誤操作してしまうかもしれない背面タップをする必要がないのである。

試しに、スマホの背面を三回タップしてみる。

すると、今までアニメの静止画を映していたスマホの画面は消え、暗くなった。確かに、使えなくなさそうな機能である。

しかし、好んでこのように操作はしないだろうな、なんてジャッジを下していると、暗くなったハズの画面に誰かが映っている。

「ん、あれ？ あ、あれれ？　なんでカメラオンになっちゃってるの！？」

おそらく、背面タップが誰からも使われることのない機能であるため、世界において想定されていない挙動をした、という判定になったのだろう。

「あ、あのお。もしかして、見えちゃってます？」

同年代くらいの女性だ。長い金髪と、イヤというほどの白い肌が、俗世離れた雰囲気を出している。

「見えています。あなたも、私が見えているのですか。というか、見ているのですか」

「見えちゃってますよ、バツチリ。ええ、それはもうクッキリと」

風貌に反して、口調は碎けている。話しやすそうな印象だったので、いろいろと聞くことができるかもしれない。

「教えてほしいのですが、あなたはどのような存在でいらつしやる」

「わたし？　わたしは、まあ、なんと言いますか。一番近い言葉を使うなら、警備というか、監視というか」

「監視？　見張られているのですか、私は。さっきまでに二組ほど同じケースに遭遇したんですが、あれも同じ

ように私を観ていたのですか」

「さあ、同じかどうかはわからないですねー。わたしは仕事でやっていますから。皆さん色んな動機があるんじゃないですかねー。息抜きに観るとか、真面目に、楽しむために観るとか」

「確かにそんな感じだった。でも、勝手に観るなんて、ひどいじゃないませんか、みんなして」

「ひどくはないと思いますよ、普通のことです。アナタさっきまで、このスマホで何か観てたでしょう。それと変わりません」

「どういことですか。私はマンガやアニメのキャラクタ―だとも仰るのですか」

「まー、アナタたちの理解できる概念をお借りするなら、そうですね」

「なっ……」

「だってわたしたちがつくりましたから。アナタたちのこと。あ、わたしたちがついていうのは上司というか、ご先祖様の方々のことというか……。わたしが直接やったってワケじゃないので、そのところはよろしくお願いしますね？」

言葉が出ない。彼女の言う事を真に受けるなら、私は、というか私たち人間は、彼女たちによってつくられた存在である、ということになる。

「もしかしたら、アナタが読んだり観たりしたマンガや

アニメや小説。まあ、なんでもいいんですけど。そこに
いる人たちも、同じように思ってるかもしれないよー、
知りませんけど。勝手に観てヒドいなんて、アナタが言
えたことじゃないかもしれませんよ」

「それは確かに、そうかもしれませんけど……」

創作上の人物はあくまでもキャラクターであって、生
身の人間と同等に扱ったことは、確かになかった。そう
いった線引きが、確かにあった。

私たちとキャラクターを分断する、何かの基準。その
境界が今、足場を崩してグラグラと揺れている。

「あなたたちが、私たちを作ったと。さっき仰いました、
よね」

「はあ、いい、そうですね。繋がっちゃったのも何かの縁
ですから、聞きたいことがあればお答えしますよ。堪
えられる範囲で、ですけど」

「私はずっと、自分で意識して、ここに存在していると。
そう確信して止みませんでした。私が存在している根拠
は、私自身の意志が裏付けている。そう思っていました
が、あなたは私のことを、いや私たちのことを『わたし
たちがつくりました』なんて仰る」

「いや、まあ、ホントのことではありますから。わた
し、嘘はあんまりつきたくないタイプ、ですから」

「だから私は、今自分の意志が、自我なんてものがある
のか、疑わしくなっているんです。あなた方は、おそら

く何かを意図して私たちをつくった。マンガ家が、小説
家が、魅力的なキャラクターを生み出しているように。
彼らキャラクターには、考え行動する主体としての意識
がない。意図はあるにしても、それはクリエイターが意
図してもたらしただけです。これが、私と彼らキャラク
ターの違い。そんな風に考えていましたが、あなたの話
を聞いて、そうではないのかもしれない、と思ったので
す」

「ふんふん。なるほどお」

「ですから、聞きたい。あなた方に聞いてわかることで
はないかもしれないが。私が思考の主体として、ここに
立っているという事実。これをどう受け止めたら良いの
でしょうか。もしあなたの方が私をつくったというのがマ
ジのマジなら、その結末も、あなたの方が決めるというこ
とではないですか。私は今後、まあこれまでもですが、
色々なことに苦悩し、決断を迫られることになると思ひ
ます。ですがそれもすべて、あなた方につくられたもの
だったとしたら。呑気に観ていた家族やカップルの方々
は面白がるかもしれませんが、私からしたら全てが茶番
になってしまふ。あれこれ悩むのも運命の内、その結果
生じるあれこれも運命の内。これでは生きる意味がなく
なってしまう。全て、決まっているのなら」

まくし立てた独白を、画面の向こうの彼女は（おそら
く）真面目な顔で聞いてくれていた。

人差し指を唇に添え、少し考えた素振りの後に、ゆっくりと口を開いた。

「うーん、どうやって答えたら良いでしょうかねえ……。まず言えることとしては、わたしたちも誰かにつくられているという可能性を、完全に否定することはできない、ということでしょうか」

「そうなんですか？ 私はてっきりあなたの方のこと、神様みたいな、そういう方々なのだと思っていたのですが」
「神話だって、結局は書いた誰かがいるんですよ。昔会った人の受け売りなんですけどねー。誰かにつくられてなんかない、なんて思う方が驕った態度な気もしまいます」

「それは確かに……」

「あと、アナタたちの運命がどうなってるか、みたいな話でしたよねえ。結論からいっちゃうと、わたしたちもよくわかりませーん」

「よくわからない？ それがよくわからないのですが」
「結構、ライブ感強めて作ってるんですよ。アナタが未来どうなってるかなんて、わたしたちにもわかりませーん。アナタたちの世界で一年モノの作品を制作していく時とか、大体そんな感じみたいですよ。大まかに設定とかザックリした展開だけ決めて、ちよつとずつつくっていくんです」

かなりの自転車操業である。口調はのほほんとしてい

るが、かなり殺伐とした雰囲気のところでは働いているのかもしれない。

「まー、つまるところ、頑張れってことです。わたしたちも頑張ってます。それでいいということにしませんかあ」

「聖さーん。休憩入ってー」

「はあーい。時間みたいですよ。ではでは、それではー」

「ちよ、ちよつと待って。まだ聞きたいことが」

そう言った頃には遅く、スマホの画面は明るさを落とし、私の顔を映すばかりとなった。ついでに、充電も切れていた。

あれから一週間くらい、彼女との会話、またそれ以前の邂逅を思い出しながら、ずっと思考に耽っていた。

結果として、私は一番大きいマトリョーシカなんかではなかったのだ、と考えを改める結果に至った。それに、アニメを観て無限の劇中劇を想像するというのも、なんだか憚られるような感じがして、しないように意識している。彼らキャラクターも私と同じ、見てんじゃねえよと、そういう風に思っているかもしれないからである。

先日ふらっと立ち寄った雑貨屋で、マトリョーシカを

売っているのを見つけた。一番大きい個体が十一センチほどの、五重構造のマトリョーシカである。

それを買ってきて、ひとつずつ出して大きい順に並べて、自室の棚に飾った。

それから三番目に大きいもの、つまり真ん中の固体の額に、赤ペンでぐりぐりと丸を書いた。

私が、私であるために。